

●二人で味わう古典和歌(83)

稲荷山いなりやまけふきさらぎの初午はつごまに乗りてぞ神は人をみちびく

おみくじの歌

伏見稲荷大社「総本宮稲荷大社神籤」二十二番・末大吉の歌。

「二月の初午の今日、稲荷山におわします神は、馬に乗って山をくだり人を導く」。

伏見稲荷大社は、京都市伏見区深草にある、全国三方の稲荷神社の総本宮。稲荷山へつらなる真赤な千本鳥居、といえはわかる人も多いだらう。

初午（二月初めの午の日）の稲荷詣は、『枕草子』一五二段「うらやましげなるもの」にも登場し、清少納言も苦労して稲荷山に登った様子が記されている。

右のおみくじの歌は、初午の日に稲荷山に鎮座された稲荷大神が、五穀豊穡の神として田に降臨するとき馬に乗ってくるという伝承に基づく。「初午」だからこそ「馬」だけでなく、神様が馬に乗って山から降りてくるというのが、



颯爽としてかっこいいなあ。しかもそれがお稲荷さんの神様であるところが、おもしろいなあ。

このおみくじの解説には「思わぬ他人の助けによって、思う事の成就する兆である」と書かれていて、それは農作業に馬が大きな助けになったところからの言葉という。こられた、なつかしく胸に沁みるいい解釈だなあと思う。

伏見稲荷大社には、大吉上の「大大吉」、大吉に向かう「向大吉」、はじめは凶だがやがて大吉になる「凶後大吉」など、独特の励まし籤があるらしいが、ぜひとも二十番、この歌が記された、めでたさもほどよい「末大吉」を引き当ててみたい。

おみくじの歌のなかでもっとも古いのは「八雲立つ出雲八重垣つまごみに八重垣つくるその八重垣を」（『古事記』）。
八重垣やまのかわりを退治して櫛名田比売うしななひめを娶った須佐之男命すさのおののみことが、出雲の須賀の地に宮を造ったときの、寿ぎと祈りの歌。和歌史の初めの一首が、おみくじの歌の扉も開いたのだ。

たった三十一音の韻律詩ゆえに、和歌は謎めいた神の言葉にもなり得たのである。
（小島ゆかり）